

第六回 闇に降る雪

—

ここに、一幅の対聯がある。

その一つにはとある術師が述べた言葉が、もう一つにはまた別の術師が発した言葉が、それぞれ記されている。

この二つの言葉は、まったく違う時、違う場所において、お互い知らずに口にしたものである。だが偶然にも、二人の対照的な性格がよく現れており、のちに衝派源流の宝の一つとして緑宝寺に納められることになった。

左の聯にいわく

闇夜に雪の降るごとく

幽かそけき白は黒に溶けぬ

— 秀泉碓しゅうせんたい

右の聯にいわく

闇夜に雪の積むごとく

幽かそけき光大地を染めゆ

— 鴻妙連こうみょうれん

二人がいかなる人物であったのか、数少ない資料から追って行くのは困難である。ただでさえ衝派の資料は少ないのだが、宝にまでなるほどに有名であったはずのこの二人、特に前者の名は、他では見ることができない。

衝派はむしろ、この人物に触れることを、避けているようにさえ思える……

『術師録』衝派の章より抜粋

二

町角で商売をする者がいる。

その店が出はじめたのはいつごろからなのか、町に住むだれ一人として知らなかった。不思議がる者がいないのは、知らないことそれ自体、気付く者がいなかった証拠である。

ともあれ、その日もその店は開いていた。

城郭にほど近い、人気の少ない場所にある古い家、昔は幾多の盗人を阻んだであろう、白粉の剥けた壁のその前に、似つかわしいと言つても失礼にあたらぬほど古ぼけた机が一つ。

上にかけてあるのは、日に焼けて茶になつた木綿の布きれ。通りへ面した部分には一文字大きく『易』と書かれている。

してみると、机の上に置いてあるものは、筮竹のつもりであろうか。割つたままで太さも長さもまちまち、あちこちにくびれやささくねが目立つ竹が數十本、なかば枝のついた竹の器に、ただ無造作にぶち込まれている。これでとなりに湯でも沸いていれば、そば屋と間違われかねない。

机の後ろには、男が一人。よれた十徳帽からはみ出たぼさぼさの髪。薄汚れたねずみ色の袴。袖からは、ひものような腕が、襟からは漬け物のような首が、それぞれにゆつと突き出している。

このような店にだれが来るといふのか？ 商売をするのによい場所でないことは間違いない。

しかし、その日もその店は開いている。

三

「ちよつと休みましょあよあ」

十を過ぎたくらいの少女が言う。うす緑の着物に黒っぽい綿入れ。腰より少し短い髪を編み上げて後ろにたらし、大きな目に疲れをためながら、足を少しだけ引きずるように歩いている。

「あとちよつと、頑張るよ彩ちゃん」

応えたのはその前を行く、少女よりちよつとだけ背の高い少年。こちらは少しくすんだ蒼の衣に革の

3 第六回 闇に降る雪

上着。旅草履せうりの先はずいぶんとほつれ、彼の長旅を十分に物語っている。右肩に葦の笠、左肩には荷物の袋。おそらく少女のものであろう、うす紅色をした幅のある木綿ひもでまとめられた髪が、歩きたび尻尾のように揺れている。

あたりは一面荒れた畑。脇に小さな川。その中に、疲れた様子の子供が二人。

人がいない。ここ数日、だれにも出会っていない。これほど広い道なのに。…もつとも、これは今が初冬であることを考えれば、納得できないでもない。だが、疲れを引きずって歩いている子供たちが、そんなことに気付くはずはなかった。

泊まる家もない。野宿は慣れた少年だが、こうも続けば嫌にもなる。

恐さがないといえはうそになる。現に少年、雷遊子の指は震えていた。子供だけの旅だからではない。ついこの間までは、一人で旅していたのだから。それだ

けに、自分が気弱になったことを認めたくなかった。「ほんとは行くのお？」

彩花の声がややふてくされたように聞こえる。

「いくのー」

言いながらその手を掴む。と、手に妙な震えをおぼえた。少女、彩花さいかもまた震えていたのだ。雷遊子はそのまま、手を引つ張りながら歩いて行つた。後ろからのくすくす声は、とりあえず無視することにした。

しばらくして、雷遊子はふたりの手から震えが消えて行くのを感じた。手と手の触れあうその場所から、身体中が暖かくなるように思えた。

やがて、目の前に家ほどの高さの壁が見えた。

県城の門をくぐる。子供二人は特に怪しまれることもなく、すんなりと中に入れてもらえた。

城門からまっすぐに延びる一本の道。その足元が

見えないほどの人、また人。周りには、今まで通った町の何倍もの店の列。

二人が来たときは、市の真っ只中だったのである。右を見ればお菓子に果物、左を見れば芸人に見世物。大きな市を見たことのない子供たちには、もう全身これ好奇心の塊となつて、人の河の中へ飛び込んでいった。

二人は——恐らく旅の間に覚えたのだらうが——懐の財布をぎゅつと握つたまま、歩いていった。

お菓子の山の前で涎をたらしかけている雷遊子。その首に腕を回し、彩花が強引に引き剥がす。

かと思えば、芸人の衣装に見惚れる彩花の腕を、雷遊子がぐいぐいと引つ張る。……もつともこちらの場合は、彼女が飽きて離れたと言つた方が正しいが。ともかく、二人とも久しぶりにはしゃぎ、笑い、そして……お腹が空いてきた。雷遊子はすぐ近くに見つけた饅頭屋を指差して、

「あそこで食べようか、彩ちゃん」と、後ろを振り

向いたが、少女の姿がない。

右を左を必死の形相で見回しながら、雷遊子が叫ぶ。

「彩花ちゃん!!」

叫び声は、すぐにあたりの喧騒に紛れてしまった。

四

「迷つたわね」

彩花は頭を掻いて空を見上げた。やや黄色みを帯びた雲が、空全体を包み込んでいる。ふう、とひとつため息をつく。どう考えても、あの人ごみで雷遊子を見つけれられるはずがない。そんなことは子供の彼女にもわかつた。

「しかたない、か。この中にはいるんだし、そのうち会えるわ」

半分は自分に言い聞かせるようにして、そのまま歩きはじめた。

いつのまにやら人気がなくなる。背丈の四倍ほど

5 第六回 闇に降る雪

もある壁の脇。木々の間に、倉のような建物がぼつぼつとある。その一つにへばりつくように、店が出ている。近寄ると大きな『易』の一字が目に入る。

少女はその前まで来て、ぼろぼろの椅子にちよいと腰をかけた。少しの間、目の前の男を眺めていたが、「おじさん、占いの？」と声をかける。

男は目を開けずにくくりと肯く。

「えと、一緒にいた子が、いまどこにいるか教えて欲しいの。…お金、ないけど……」

易者は目蓋を開き、軽く笑って言った。

「いいよ。私も暇だったところだ。誰を探すかね」

彩花はまだ不安そうに相手を覗きこみながら

「その、名前がいい？」「雷遊子」って言うの。雷で遊ぶ子」

その名を聞いた瞬間、易者の動きが止まった。そして、一瞬だけ厳しい表情になり…すぐにその表情を隠して笹竹を振るった。

「ふん。会えばいいんだね。それなら、私の家に

来なさい。そのうち、彼は私のところに来て来る。そう出ている」

少女の顔が輝いた。

「ほんと!? あ…本当にお金ないんだけど、もし来なかったら、泊まっていたいい?」

あまりの態度の変化に、易者は呆れながら肯いていた。

五

「風遊子、そろそろ場所を見てくれないか」

荒れた畑の中、四十前後の男が言った。杖を持った小柄な男ではあるが、皺の交じるその容貌は、威圧感すら感じさせる。

脇を歩いていた十くらいの子供が、男の言葉を受けて懐から掌ほどの玉を取り出すと、暖めるように右手をかざした。

しばらくすると、半透明の玉にぼうつと光の点が

浮き出して来た。緑の点がひとつ。だいぶ離れて赤い点、そしてそれに重なるように燈色の点。

「だめです。重なってて、どっちの方向かわからな
いや」

少し肩を落とした少年の背中を、男がぼんぼんと叩いた。

「まあやむない。それだけ近づいたということだ。もうすぐ、雷くんに追い付けるぞ」

言いながら懐から地図を取り出す。

「ふ…む。すぐ近くに、町ががふたつあるな。」

よし、二手に別れよう。きみは大きな泉城の方に
行きなさい」

こくり、と小さな頭が動く。

「鮑采さんは？」

「私はこつちの小さな村を探す。居てもいなくても泉城の方へ行くから、きみはそこで待っていなさい

あ、それと…」

すでに場を離れかけていた風遊子が、え、と驚い

たように振り返る。

「泉城のような大きな町では、あまり術を使わないように。…場合によっては、他人が巻き込まれるからね」

少年は、よくわからないような表情で、それでも一つ二つなずくと、大きな壁が見える方へ歩いて行つた。

泉城の大きな門をくぐつた風遊子は、やはり目の前の喧騒に圧倒された。だがしばらくすると、その中から見知った顔がやって来る。ずいぶん大きくなり、体つきも頼もしくなつたけれど、顔だけは、変ることがない。

「おおい、雷遊子!!」

小さな人影が、くるつと振り返る。苦いその表情がとたんに輝いて、風遊子のもとへと駆け寄ってくる。その肩に飛びつくように腕をまわして、息が落ち着くのも待ち切れないように怒鳴つた。

7 第六回 闇に降る雪

「女の子!!」

突然のことに、風は目の前が白くなるのを感じた。

「おんなのこ?」

ようやく口にした言葉も、ただ間抜けに響くだけ。しかし相手は何度も真剣にうなずく。

「そう、女の子。ぼくくらいの背丈で、髪の毛が長くて、編んでる!」

目の前はまだ白い。

「おんなのこ……ん?」

わずかながら、白さがぬけてきた。頭のすみに何かがひっかかる。

「女の子——が、どうしたって?」

「いなくなっちゃった、どこにも!」

「それを先に言えよ!!」 風遊子の目の前から、白さがいつぺんに吹き飛んだ。雷遊子の腕を引つ掴むと、空いた手で軽く印を組み、気合と共にぼん、と飛び上がる。ふたりの姿はそのまま、空中へと溶けてゆく。

あとには、喧騒だけが残った。

六

「で、どの子だった?」

町外れにある、高い杉のてっぺん近くに、子供が二人。

「さっき言ったじゃないか。ぼくくらいの背丈で……」

「髪が長くて編んでる、か。んなモン、何人いるかわかるもんか!」

雷遊子は少し考えて、はっと思い当たった。

「あとは……そうだ、あつたかい光がでてたっけ」

「え、術師なのか、その子!?」

そう、普通の人間が、空に溶けたりするわけはない。彼らは術師であった……いや正確には術師見習と言つべきか。世に不偏的に存在する『光』をもとに、『空魔』というものから身を守るために術を振るう自衛集団『衝派』の術師。

だが、彼らは世の歴史に残ることがない。その存在を知る者は少なく、術師自体はさらに少ない…はずである。

雷遊子が首を振った。

「ちがうよ。彩ちゃんは普通の子だよ。」

「……だけど、ほんとにあつたかいんだよ」

そついう旧友の顔を、風遊子は羨ましそうに眺めた。が、自分のその表情に気付くと、少し赤くなりながら咳払いする。

「そつか。でも、それならオレじゃなくて、雷の方が探せるんじゃないか？」

術師の多くは、人の中にある『光』…『内光』を感じる事ができる。雷遊子はこの能力が非常に強いのである。

「でも、こつ人が多くちゃ…」

うつむきがちになる雷遊子の頭を、風はぐい、と持ち上げた。

「つべこべ言わずに、やって見ろよ。だめなら別の手考えればいいしー！」

雷遊子はちよつと口を尖らせたが、わかつたと一言いうと手を組み、目をつむった。その体勢のまま、身体を右へ、左へとゆっくり動かす。風遊子はそのたびに、落ちないように身体のかたむきを直してやる。そんなことがしばらく続いたのち、雷の目がぱつと開いた。

「あそこ！あの、倉みたいなところ!!!」

「よしきた！」

言いざま、風は雷の手を掴んだ。その場から、二人の姿が消える。

「あの中、だな」

倉の前。風遊子が確認する。雷はちよつと目をつむって、

「うん。間違いない。あそこの二階。奥の壁沿いにいる」

9 第六回 闇に降る雪

風はあきれた。相手の顔をまじまじと見て

「そこまで……わかった。じゃ、いこう」

と、相手に腕を絡ませて身構える。

雷遊子はいままでと違う方法に疑問を抱いたが、それはすぐに解けた。腕を掴んではいけないのだ。

風遊子はそのまま、ひょいと宙を見上げるようにして顔をあげ、目を閉ざす。なんどか首をひねるようにはしていたが、ひとつ大きくうなずくと目蓋まぶたを開いた。

「ちようどいま、低い『風』が、あの部屋の真ん中を流れてる。じゃ、いくぞお……せえ、のッ！」

突然、周囲から『色』というものが消え去る。木々の緑も、空の蒼も、土の黄も。すべてがおなじように見える。ただ、形の違いからこれは木、これは土とわかるだけである。しかしその形すら、だんだんとぼやけてゆき、しまいには何もわからない混沌とした気配があるだけとなる。

絡んでいる腕の感觸、肩に食い込む笠の重み、舞上がる土のにおい。すべてがまざりあい、混沌として溶けてゆく。あとに残るのは、ただ気配。そして『光』。

『風』。世に流れ続ける『風光』の道。

そこに飛び込み、一体となつて移動する。これを行える人物を『風乗り』と呼ぶ。風遊子はその名の通り、『風乗り』としてはずば抜けた才能を持っていた。そもそも、術師見習いがこれほどつまく『風』に乗れること自体、異常なのである。

七

しばらくして、世界がまず形をなし、次第に色を取り戻していった——風から、出ようとしているのだ。しかし雷遊子はまだそれに気付かない。『風乗り』たる風遊子はその腕をぐい、と引つ張つて合図し、両手で印をきめはじめた。

風から出た二人を待っていたのは、女の子の叫びだった。

「待って！術使っちゃだめ!!」

彩花の声である。雷遊子と風遊子は思わず結果を張って…お互いの顔を指差して吹き出した。二人とも、相手の術を防ぐつもりだったのだ。

結果が解けてから、雷は彩花に近づいて言った。

「だいじょうぶ?」

少女はぶくつと頬を膨らませている。

「遅かったわね。ずっとここで待ってたのよ」

唖然とする二人。風遊子がたまらずつぶやいた。

「なんなんだ、こいつは?」

それを聞いた彩花がどなる。

「失礼ね！初めての場所なんだから、迷ったってしかたないじゃない!」

そう言う彼女の瞳は、安堵の色であふれていた。雷遊子はほっと胸を撫でおろしたが、つきあいのない風遊子の方はそうはいかない。

「かわいげのねえ奴！怖かったなら怖かったって言やぁいいじゃないか!!老師だって言ってたよ。怖さをなくしたら、生きていけないって」

じろつ、と視線の音がしそつなくらいの目つきで、少女が風を見据える。

「……雷ちゃん、誰、これ?」

雷はくくくつと笑って、答えようとしない。風が怒って言う

「助けに来た人間つかまえて、『これ』とはなんだよ、『これ』とは」

雷遊子はさらに大きく、けらけらと笑い続けている。

「雷!なんだこのへちやむく、わは!!」

「雷ちゃん、なによこのちんちん、くりん!」

雷遊子の笑いは、すでに息が苦しくなるほどになっていた。ときおり、げほげほと咳き込む音がする。

「雷ちゃん!!」

「雷遊子!!」

二人の声が同時に響いた。絶妙の間合いに、雷の

11 第六回 闇に降る雪

笑いが、さらに大きくなる。彩花も風遊子も、もはや口喧嘩くげんかをする気分ではなかった——あまりにも、ばかばかしくて。

結局のところ、雷遊子がまともに喋しゃべれるようになるまでに、二刻を要した。

「あらためて紹介するよ。こっちは、ぼくのむかしからの友達で、風くん…風遊子。この子は、もうちよつと西の方の町で知り合った彩花ちゃん」

「風遊子？ 雷ちゃんは雷遊子よね……兄弟なの？」

二人の顔を見比べている彩花に、風遊子が答えた。

「んにゃ、ちがつよ。雷もオレも捨て子だから…」

「雷の中で拾われたから雷遊子。風くんは風の強い日なんだよね」

「というわけだ」

「いいかげんねえ」

彩花はあきれ顔である。

風はそれにかまわず、最初に感じた疑問を口にした。

「しかし、なんで俺達が来るのわかってたんだ？」

「あんたが来るなんて思ってたわよ」

むつとして一歩前に出る風遊子を、雷が押さえる。

「でも、ぼくが来るのがなぜわかったの？」

「それは、易者さんが…」と、彩花が言いかけたとき、とんとんと階段を上がる音が聞こえてきた。三人が振り返る。

「あ、易者さん」

呼ばれた男は、三人の頭に手を置いた。

「よく来たね。雷遊子くん」

雷はその顔をまじまじと見つめた。どこかで見た覚えがある。だがそれがどこだったのか、まったくわからない。そのうちにはつと気付いて頭を下げた。

「彩ちゃんを助けてくれたんだよね。ありがとございます」

彩花が後ろで赤くなりながら頭を小突こぶく。易者はにやつと笑った。三人の顔を順に眺め、しつかりうなずくと

「あとで火を持って来てあげよう。今日はここで寝なさい」

そう言つて、彼は階下へと去つて行つた。

八

雷遊子と風遊子は、積もる話をひとつづつ片付けていた。いままでの旅のこと、旅で出会つた人のこと、などなど……二人が顔を輝かせ、また曇らせながら話しているのを、彩花は口も挟まず、じつと横で聞いていた。

(へんだな)相手の話がふと途切れたとき、雷はいつもと違つて静かすぎる少女をいぶかしげに見やつたと、そのとき、視界の中に見馴れないものが入る。

「あれ?」

話の腰を折られて、顔を上げる風遊子。だが相手はただ一点を見ている。窓の外。すでにつつす暗い空の下、何かが降つている。

彩花が窓へ駆け寄る。後ろから少年二人も、早足でやつて来た。

「あ…これ、雪?」

風遊子が、感慨深げに言う。隣でぶんぶんと首を縦に振る雷遊子。もともと、衝派術師たちの本拠地、緑宝寺には巨大な結界がかかつており、極端には暑くも寒くもならない。雪は彼ら…特に旅に出ていなかった風遊子には、話でしか聞いたことのないものなのである。

「ほんと。雪だね」振り向いた少女の微笑みからは、さきほどまでの緊張が感じられない。無邪気さを取り戻した彼女に、風遊子までも目をそらしたほどである。

だが、その雰囲気はすつと消えた。少女は窓にもたれ、外を見つめる。

「でも、ちょっとがっかりだな。夜だと…黒い中だと、白いものも黒くなつちやうのね…」

風遊子ははつとした。なにかが、心に引つ掛かる。

13 第六回 闇に降る雪

雷遊子は悲しそうな瞳でその背中を見つめていたが、軽く指を合わせると、今度は真剣な表情で指の隙間すきまを覗にらみつける。

やがて、指の間がぼつつと明るくなりはじめた。雷はそのまま窓に近づくと、彩花の脇から手を外へ伸ばした。

「せえ、のっ！」

掛け声と共に、手の中の明かりが輝きを増した。と同時に、あたりの景色が一変する。

「ね。ちよつと光があれば、雪はきれいに光るんだよ。闇の中だつて、雪は、黒くなんかないさ！」

少女は回りの景色をまぶしそうに眺めながら、うんうんと肯いた。その目のあたりが光っている。雷遊子はそれに気付いたが、なんとなく聞きづらくて黙っていた。後ろにいた風遊子もまた、その妙な雰囲気ふんいきに言葉を失っていた。

子供たちの後ろでは、いつの間にか上がって来たの

か、易者が火鉢の火を起こしていた。窓の方では、寒さなどお構いなしで雪に見とれる子供たち。その後ろ姿をじつと見つめ、微笑みながら彼はぼつりつぶやいた。

「そつか、ああいうところは師匠ゆずりなんだな……」

九

翌日。

雪は夜半でやみ、いまはもう城壁の隅ぐもに痕が残るばかり。

易者はいつもの通り、店を開いている。背後の家の二階から、ときおり子供たちの声がする他は、特に変ったこともない。平凡な一日。

……と、そこにいきなり声がかかった。

「おい『神足』！」

易者の心臓が、びくと跳ね上がった。がばと頭を上げると、見覚えのある顔が迫って来る。記憶の

中よりしわが増え、髪も白くなりつつはあるが…

「げ、鮑采……『裂山杖』の鮑采じゃないか!!」

浅くかぶった笠をとる。あつさりと束ねられた長い髪が、風に揺れた。

「久しぶりだねえ泉碓。もう何年ぶりだろう?」

「なんでお前がここに……と、待てよ。ひよっとして、緑宝寺か?」

うなずく鮑采。頭を掻き、

「うまく、乗せられた」と笑いながら粗末な椅子に腰をおろした。泉碓はやや険悪な表情になって

「緑宝寺にやって来たとは聞いてたが、雷遊子の捜索に加わるとはな。ずいぶん気に入られたもんだ」

だが、相手はそのような表情にもかまわない。

「あの子の師匠…妙漣どのがやられたとき、あの子の行方を見逃してしまった。お前さんはそれに責任を感じて、こんなところで待っていた…」

運命とは半ばほどいた綱のごとし、行く道は多けれど至るところは一つのみ——か。

さすがと言うか…ほんとにお前さんは、占師でも食っていけるな」

易者は帽子を少し深くかぶった。目線が見えない。「…わかった。お前の目的は、雷遊子探しだけだ。なら目的は同じだ。それ以上言うこともない」

その表情を探るように眺めながら、鮑采は感慨深げに言った。

「そうだなあ。たしかに、きみとやりあっていた頃は、まさかこうなるとは思ってもみなかったよ」

易者は一瞬驚いたような表情を見せると、すぐに真剣な顔になる。

「そうか? 私はそうでもないぞ。お前さんは衝派そのものに敵対するわけじゃなかった。流派の立場とやり方こそ違え、私と同じ、術師と世の中との橋渡しじゃないか。」

少なくとも私は敵だなんて思ってなかった……今も、だ」

「それにしては執拗だったな」そう言って鮑采はに

やつと笑った。左手に抱えていた笠をまた頭に寄せ、面倒くさそうな手つきでひもを結びながら、二階の窓へと視線を移す。

「さて、迎えに行くか」

「やめとけ」

突然のぶっきらぼつな言葉に、鮑采はちよつと戸惑った。

「よく見ろよ、あの顔を」

易者は後ろを振り向き、二階の窓へ向けて顎をしゃくった。そこでは子供たちが楽しそうに笑いあっている。

「あれだよ。あれがほんとなんだ。」

——考えてもみろ、とんでもない術持つてるからみんな忘れてるが、あの子はまだ十そこそこなんだぞ」

「…そうか。ずっと、大人しかいなかったのか」

泉碓は大きく首を振る。

「ああ。あの子の回りには、大人しかいなかった。少なくとも、同じくらいの歳の子供なんかいやしな

かったんだ。妙連も、そういうところは抜けてるんだよなあ」

ため息まじりの泉碓の言葉を噛みしめながら、鮑采はじつと窓を見つめていた。そして、ふつと表情をやわらげる。

「あの子らだけでも、盤印を届けることはできる、か。緑宝寺どのには悪いが…たしかに引き上げた方がよいかもしれん」

「ここではじめて、泉碓はほつとした表情になった。鮑采は黙って目だけで応える。…誰が見ているわけでもないのに、言葉ですべてを伝え合えないのは、役目を背負っていた者たちの証しなのかもしれない。

「うん、頼むよ。あとは私が見てるって、言つてくれ」

「ついて行くかい？」

易者の頭が大きく振られた。はずみで帽子が前に落ちる。が、彼はそれに一瞥もくねず、目の前の旧

友の目を見据えていた。

「わかった。風くんには、適当にごまかしといておくれ」

そのまま歩み去って行く後ろ姿を眺める易者の耳に、馬の蹄ひづめの音が聞こえて来た。

十

こちらは二階の子供たち。

彩花までまじって旅の話を膨らませていると、なにやら外が騒がしい。雷遊子がばたばたと窓に近づき、下をのぞく。

そこでは、官吏の服を来た若い男が数人、易者を取り囲んでいた。よく聞くと、

『怪しげな術によって民を惑わす不届き者！』だの『易者など、町の邪魔者だ！』だのといった罵声が聞こえて来る。だが、易者は答える風でもなく、むしろ呆れているように見える。

『昨日町中で消えた子供が、この家にいるそうじゃないか。人さらいをするような奴を、この町においておけるか!!』

この言葉に、雷と風は愕然となった。

「しまった！オレが人前で術使ったから…」

県城こゑに来る前、鮑采に受けた注意が頭を駆け回る。

「しかたないよ。とにかく、易者さんを助けなきゃ」

言い合っている間に、窓の外からは馬のいななき。はっとした二人が窓から首を突き出すと、すでに官吏も易者もおらず、残ったのは遠ざかる蹄の音だけだった…

十一

縛られると同時に目隠しをされていた。馬から降ろされると、しばらくの間右だ左だと歩かされ、その度に人の声が少なくなっていく。やがて、足元の感覚が土から木に変わり、終しまいに泉確は、とある部

17 第六回 闇に降る雪

屋に放りこまれた。

目隠しをはずされて見えるそこは、小さな部屋に鋼の戸をつけただけの簡単な牢屋。ただ一つ、普通と違うところは、四隅に置かれた石の柱。部屋を支えるわけがなく、さりとて飾りとしては奇妙。もっとも、術師ならば馴染みのもの。その目的も、また明らか。

「泉碓。もう逃げられんぞ」

泉碓は思わず大きくため息をついた。相手が誰かは声でわかる。そして、相手がわかれば、なぜこうなったのかもすべてわかる。

「そうか、お前がこの泉尉だったか、沼碓」

白い地に銀を貼りつけた、いかにも高官といった服装だが、中身はその衣に隠れるくらいに小さな男。男は狐を思わせる狂気じみた笑みをその顔に浮かべ、泉碓の前へぐいと顔を近づけると、ささやくように言った。

「いまの俺は、泉尉の劉鵬白だ。…このまわりの石

柱を見たか？」

易者は辺りに視線を投げかけ、ふん、と鼻を一つ鳴らすと、

「これが、なんだ」

「大きいだろう。緑宝寺にもない封呪石だ！」

そして奇妙に高い笑い声。泉碓はそれをつんざりしたような顔で聞き流すと、言った。

「それは知っている。私が言ったのは、『封呪石がどうかしたのか』ということだ」

封呪石とは文字通り術を封じる石。微妙な調整を受けた異なる結界を三つ以上の石に封じ、その組み合わせによって、その中の術の成立を防ぐものである。強力な術を試すときによく使われる。もちろん、衝派術師の泉碓が知らないはずはない。

「ほ、ほ！『神足』も墮ちたな。身に起きていることが理解できんとは」

そして再び高笑い。笑いながら、体が汗を帯びてくる。

(汚いな) 泉碓は思わず考えた。汗がではない、目の前の相手が、である。しかし自分もまた、こうなる日が来ないとも限らない…そう思うと、目をそらすわけにもいかない。

そのかわり、彼はより残忍な方法で応じることにした。

「ほう、』身に起きていること』か…」

念のために聞いておくが、まさかお前、私のあだ名を忘れたわけじゃあるまいな？」

男の肩が、ぴくつと跳ね上がった。肩はひと呼吸の後、ことさらにゆっくりと降ろされてゆく。背後をうかがいながらのその動作は、内心の動揺を如実にあらわしていた。

「『神足』の方ではないぞ」

口先だけの笑い顔から、言葉が冷たくこぼれ落ちる。男は背を向けたまま、全身が震えはじめていた。

やがて、耐えきれないように振り向く。その目の前には、静かにたたずむ泉碓の顔。鎖入りの頑丈な

縄を、指先でもてあそびながら…

「き、きさま!?!」

それ以上は言葉にならない。陸にあがった魚のように、ただ口をぱくぱく開け閉めするばかり。泉碓はそれを見て再び大きくため息をつく。

「やはり忘れていたか」

言いながら震える相手の肩を脇へ押しやって、目の前の扉を開けようとする。

「『術師なればこそ、術に頼るな』だ。…老師の仰しゃったことが、まだわかっていないようだな。

ま、安心しろ。別にお前の地位を脅かす気はない。術を使って、得た地位でなければ、立派なものだ。それに、術師として生きる必要がなくなったのは、良いことだしな。

あの子らが来たのも偶然だ。それでもちよつかいをかけるつもりなら…私はいつでも、昔に戻ってくれるぞ。覚えておけよ」

泉碓が去った後も、鵬白の身体からは震えが消えなかつた。全身からは暑くもないのに汗が吹き出し、服が重くなつてゆく。かっと見開いた目は、あてなく虚空をさまよい、大きく開かれた口からは涎が一筋、床へと垂れて行く。

『『衝派の…死神』……だめだ、このままじゃ俺が、俺の身が……!』

その瞬間、瞳孔がぎゅつと締まった。

「そ、そうだ、たしかあの子供は、あいつが探していたはずだ。あいつを呼べば……」

けたたましい笑い声が部屋中にこだまする。それは、すでに人のものではなかつた……

十二

泉碓が臈尉の家から帰ろうとしているちょうどその頃、子供たち三人は、なんとか彼を助けようと、家を飛び出したところだつた。

仕込み笠を片手に緊張した面持ちの雷遊子。いつでも逃げられるよう、空手になつた風遊子。そして、手近にあつた刃物を二、三本懐に隠した彩花。

術師見習たちの師匠が見たら、怒り出しそうなほどの無鉄砲さである。もちろん、本人たちは真剣なのだが。

……しかし、それが甘い考えであることは、すぐにはつきりした。

城郭の脇、人気がない道を歩く子供たちの前で、何やら妙な気配がする。その異様さに気付いた雷遊子が二人を制し、反射的に結界の型を作る。

結果的には、その無意識の反応が彼らを救つた。

ピシッ

空を裂く鋭い音が、あたりに響きわたる。同時に雷遊子は、跳ね飛ばされそうになるほどの強い衝撃を感じた。子供たちを半球状につつんだ結界に、何

かが当たったのである。

地面には一文字に亀裂が生じている。結界の部分を除いて、前と後ろ。

「あそこ、誰がいる!!」

悲鳴に近い彩花の聲が飛ぶ。指の先には、木と間違えるようなこげ茶の衣を着た男が、無表情で立っている。

その隣には、雷には見覚えのある、黒衣の男。

「みんな、離れて! 狙われているの、僕だ!!」

再び、ピシツという鋭い音。雷遊子はもう、口を開くことさえままならなくなった。

「結界の中で、どうやって離れろってんだよ!」

言いながら、風遊子が二人の腕を探る。逃れる手段は、『風』しかない。彼はそう思った。

二度目の鋭い音。顔にまで疲れが見える雷遊子。彩花が泣き叫ぶ。その二人の腕を無理に掴んで、風光を感じる。そのときだった。

「な……なん、だ!?!」

思わず目を見開く風遊子。身体の中を流れる、異様な感覚。寒気さむけとも熱とも違う。ざらりとした無気味な感覚。

(なにこれ!?! からだが…からだがあ!?!)

彩花を襲ったのは恐ろしい熱。だが、しばらくするとその中に凍るような冷たさを覚える。心の奥底にある、恐怖を呼び起こされる。叫びたい。泣き叫んでそれを消したい。けれど、喉からはただ息がもれるだけ。

「だめだ…暑くて『光』が回ってくれない! 結界がとけちゃう!!」

雷遊子の胸。ちょうど盤印があるところが、光り輝いていた。熱が彼の身体を駆け巡り、そのまま自分の力を奪い去ってしまうように思える。そして実際、結界を張る力が失われていった。

薄くなった『殻かく』の結界めがけて、目にみえるほどの『光』の奔流ほんりゅうが押し寄せる。

「とける…たすけて…老師、李姐りねえ、岳生さん…みんな

21 第六回 闇に降る雪

なを、たすけて!!」

雷遊子が泣きながら叫んだ、と同時に結界が消える。抑えられていた光が、子供たちへとなだれ込んだ。黒衣の男がなにやら慌てているが、もはや止められない。

やむなく、その最期を見届けようとした男は、次の瞬間、戦慄した。押し寄せていた『光』が霧散しはじめたのだ!

その『光』がすべて消えても、戦慄はおさまらなかつた。

『なにか』が来る。

子供たちの放つた『なにか』が近付いてくる。目には見えない。それ自体は感じない。ただ、回りには消えずの『光』が消えてゆく感覚からそれがわかる。

男二人は動けなかつた。臆病呼ばわりは当たらない。『光』とは世に普遍的にあるもの。術によつて集め、また避けることはできても、なくなることはない。…それが、術師の常識なのだから。

結界を張る。術を放つ。僅かな時間で試せる限り
のことはやつてみた。何も効かない。『風』…『風光』
すら喰らいつくすその前では、すでに逃げるこ
さえかなわなかつた。

ここまでか。そう観念した男の視界に、子供たち
の姿が飛び込んで来た。

(よく私を倒せたものだ) 敵ながら、誉めてやりた
い気分である。最期にその顔を見ておこう、と目を
こらす。…おかし。三人いるはずなのに、一人い
ない。いや、一人いるはずの場所が、何も見えない。
「そんな、まさか…!!」

それが、黒衣の最期の言葉となつた。

十三

「なんだと、黒宝こくほうが!？」

薄暗い部屋の中、薄布の帳とばりの奥で、大きな椅子が
音を立てて倒れた。布に映る影が揺れているのは、明

かりの揺らめきのせいばかりではあるまい。

「は、私も信じられませんが、たしかに彼の『光』が消えました」

黒い革の鎧を着た男が、無表情な声で言う。その声からするとまだ若そうだが、黒い革で覆われた顔から、年齢は伺えない。

影の手が、またゆらゆらと揺れる。

「ふむ…やはり先程の莫気か。しかし、妙漣もあらぬのに、どうやって…」

帳の前で、男は一步前へ進んだ。

「考えますに、あの子供ではないかと」

帳が、静かに開かれた。背後の明かりに照らされ、まるで自身が影になったかのような存在が、段を一つ、また一つと降りて来る。

「妙漣の弟子…雷遊子とか言ったか？ たしかに、あり得るとすれば、それが…万々が一が当たってしまっただのか。」

だとすると、妙漣にかかわっておる暇なぞないな

「お出になられますか？」

すでに目の前にまで降りて来た相手の目を見ながら、男が尋ねた。その目には、明らかに疑念の色がある。自分の力に絶対の自信を持つ者に特徴的な光である。

「よかろう。では黒玉、すぐに奴らをつけよ。そして、子供を連れて来るのだ。」

…殺さなければ、どのようにしてもよいぞ」

黒革の男は、黙って会釈し、その場を離れた。

十四

その夜。県尉の屋敷は静かだった。……ときおり大きな音がする以外は。

「なんだ、あいつらは!?!」

県尉の振り回した腕が大きな壺にあたる。がつ、と大きく鈍い音を残してそれが割れた。だが、男は気

にする様子もない。

「全然役にたたないじゃないか!! ああ、こうしている間に奴は、奴は!!」

もう誰も近づこうとしない。すでに狂っているのかもしれない。

「そ、そつだ。兵を、兵を呼ぼう。皇帝に逆らい、怪しげな術で民を惑わす者! これなら、兵を出してもらせる…」

そのとき、彼は背後に立つ者に気がつかなかった。

「ちゃんと警告したつもりなんだがな…残念だ」

そして翌日、鵬白県尉の遺体が発見された。首に刃物によるだろつききれいな…あまりにもきれいな傷が一筋あるだけで、身体には争ったあと一つなかったと言つ。彼が倒れたあたりで、強い光を見たと言つ者もあり、また狂ったような笑い声を聞いたと言つ者もあり、人々はいろいろと噂を立てた拳げ句、不

思議な事件として忘れ去られていった。

その翌日に旅立った三人の子供と、一人の易者のことを思い浮かべる者は、結局一人もいなかった。

十五

泉城での騒ぎがうそのような、蒼い空。三人の子供たちは、再び雷遊子に付き合つて、旅をはじめていた。

「そつか、鮑采さんは緑宝寺に戻つたんだ」

雷遊子が残念そうに言つ。

「水臭いよなあ。易者さんにこ、とづてして帰っちゃうなんてさ」

風遊子が心える。

そのちよつと後ろ。彩花だけが、ひとり遅れてうつむきながら歩いている。

「どうしたの?」

その顔を覗きこむ雷遊子。

「きゃ!!」突然の大きな顔にびっくりした彩花は、咄嗟に思い切り、平手を食らわした。道の脇の草むらへ、頭から突っ込む。

しばし茫然としていた少女は、はっと我にかえって駆け出した。

「ごめん! 痛かった?」

雷遊子は頬を押さえながら、それでも笑顔で立ち上がる。

「だいじょぶだよ、彩ちゃん。そんなに考えないで。

また怖い目にあつたら、ぼくらでなんとかするから」

その顔を横目で見ながら、風遊子。

「その前に、お前に殺されなきゃ、な」

「なんですってえ!!」

彩花が激昂した。腕を大きく振り回しながら風の右頬を狙う。風遊子はその腕を左右にかわしながら走り去る。頬を押さえながら雷遊子がその後を追う。

…旅はなかなか始まってくれなかった。

子供たちから少し離れた、丘の上。男が一人、その様子をうかがっている。やがて、何事もなく北へと向かう彼らの後ろ姿を見て、すっと起き上がった。懐から地図を広げ、次の隠れ場所を探す。

「…ま、いまの私にはこれが一番似合っているか」